



まだ知らない八尾、五感で体験しませんか？ 「八尾物語」参加者募集中！

河内音頭やモノづくりの街として知られる八尾ですが、実はまだまだ知られていない魅力がたくさんあります。そんな八尾の魅力を体感できるプログラムが、「八尾物語」。長い歴史や豊かな自然、受け継がれる伝統、暮らしに根付いた文化など、八尾にしかないたくさんの魅力を新発見・再発見できます。ぜひ参加して、八尾の物語を紐解いてみてください！

大阪満喫！遊覧飛行ツアー

大阪の観光名所や世界遺産、
2025年万博会場予定地を、空の上から訪問



<第1回目> 5/21(土)・22(日)

<第2回目> 8/20(土)・21(日) <第3回目> 10/22(土)・23(日)

河内木綿文様 ハンカチ藍染体験

伝統的な河内木綿文様の藍染を、糊置き
から染めまで 一貫して体験



<第1回目> 4/6(水)
<第2回目> 8/31(水)

一期一会 老舗料亭山徳の味 & 筆手紙体験教室

老舗料亭で筆手紙をしたためる、贅沢なひととき



<第1回目> 4/20(水)
<第2回目> 7/20(水)
<第3回目> 10/19(水)

料亭山徳～世界にひとつだけの花～ 色を楽しむプリザーブドフラワー

季節のアレンジメントをレッスン



6/27(月)

本照寺で写経体験と境内めぐり

分かりやすい解説付きで、初めての写経を体験



<第1回目> 4/12(火) <第2回目> 7/4(月)

古民家×神社仏閣を訪ねる 恩智「パワースポット体験」

参拝で身を清め、築250年の
旧木綿問屋を散策



9/29(木)

のびのび描こう！ 絵日記散歩体験

心のまま自由に描き、
自分だけの絵日記を完成



10/13(木)



プログラムの詳しい内容は、八尾市観光案内所で配布しているパンフレットまたは八尾市観光協会WEBサイトをご覧ください！

<お問い合わせ> 一般社団法人 八尾市観光協会
TEL 072-997-6226 (受付時間10:00～18:00/火曜定休)
〒581-0802 大阪府八尾市北本町2-1 ペントプラザ20号

新 Yaomania

【シン・ヤオマニア】2022年 春号 Vol.43



今号の表紙:河内音頭記念館の館長 河内家菊水丸さん

もくじ

- とびら|ペーパークラフト のぞきからくり「玉串川の桜トンネル」
- 02~05|巻頭スペシャル企画「八尾マニアック対談(河内家菊水丸さん×山口孝満さん)」
- 06-07|八尾の情報館「FMちゃお」 08-09|特別企画「安田真奈監督インタビュー」「八尾市魅力ある観光創造基金」
- 10-11|八尾企業訪問「朝日航空株式会社」 12|ヤオマニアック斬 その9「八尾ミステリー」
- 13-14-15|体験企画「カフェ ベリー/有限会社 大一創芸/炭火焼鳥 最上」 裏表紙|八尾物語2022「参加者募集」



⑥

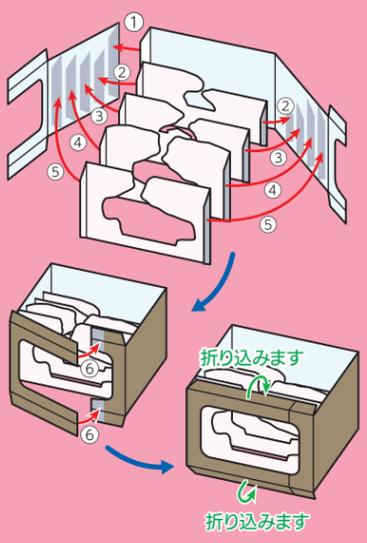
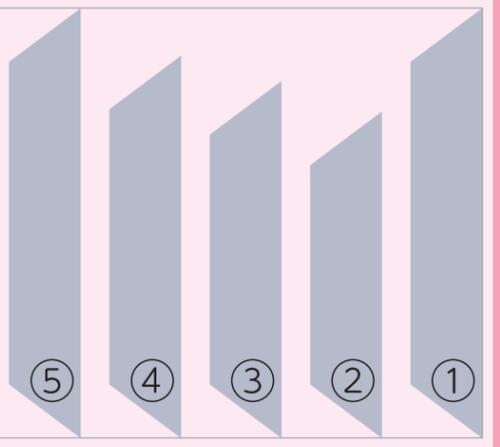
作家紹介
 1973年、新潟県上越市生まれ・在住。
 (一社)日本パッケージクラフト協会理
 事長。パッケージクラフト作家として日
 本や東南アジアで展示会・ワークショッ
 プを展開。紙工作関連の新しい楽し
 みを提案し作品を制作している。

八尾市の花見スポット「玉串川の
 桜トンネル」を、風景のイラストを
 重ねることで表現してみました!

パッケージクラフト作家
高橋和真

⑥

組み立て方
 数字の順番通りに貼りつけます。
 最後に正面の上下を内側に折り込みます。



のぞきからくり 玉串川の桜トンネル

— 切り取り線 たにおり
 ——— のりしろ

完成イメージ

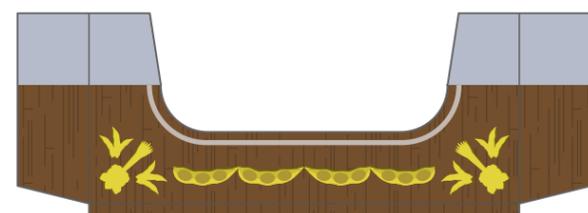
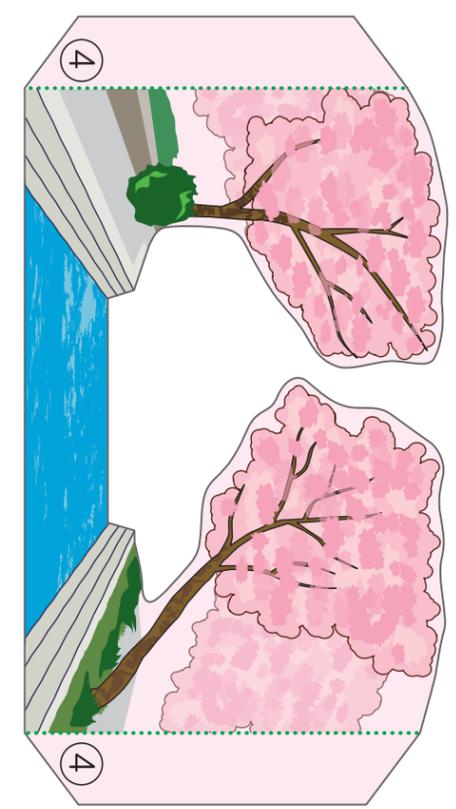
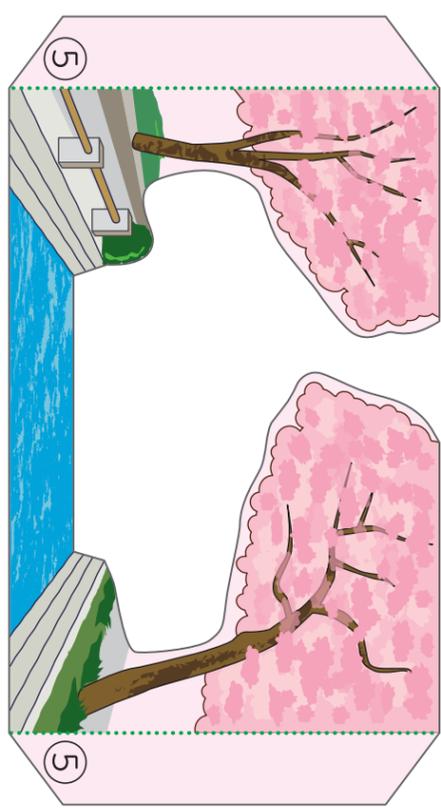
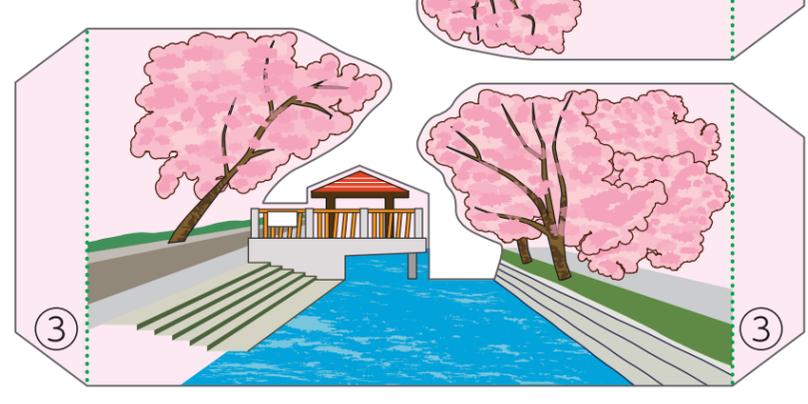
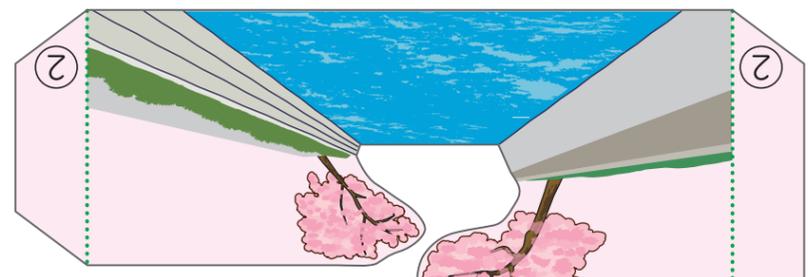
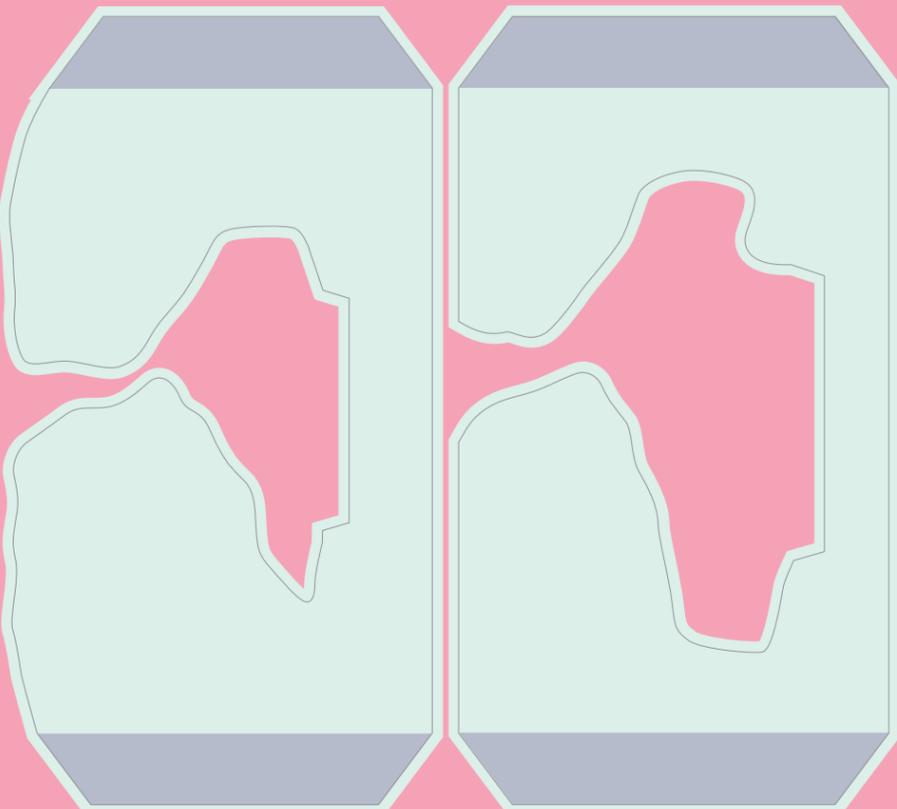
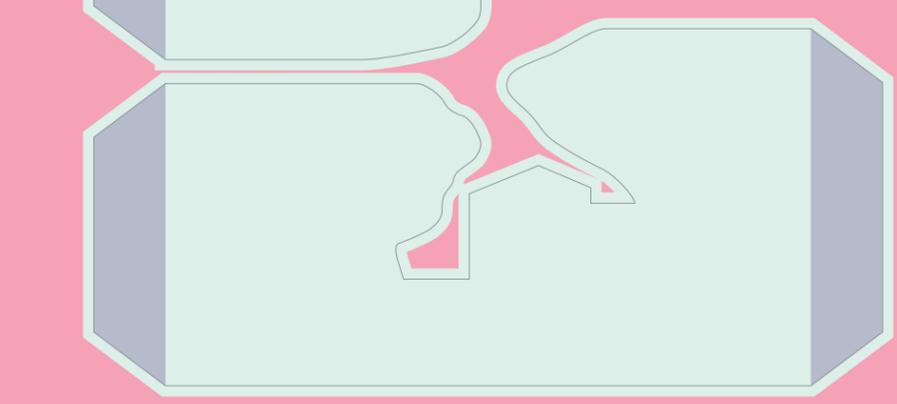
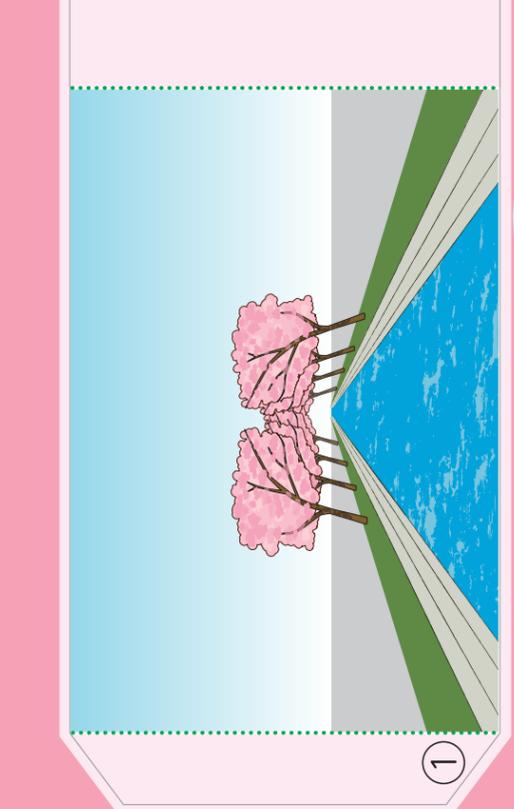
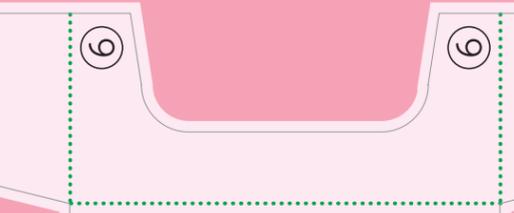


■立体感あふれる玉串川の桜並木が箱の中にひろがります!

のぞきからくり

■はさみ、カッターなどで切り取り線に沿って部品を切り取ります。折り線でしっかりと折っておきます。のり、両面テープなどを使って各部品を貼りあわせます。
 ※組み立て方は裏面をご覧ください。

玉串川の桜トンネル



◆玉串川の桜並木◆
 八尾市東部の住宅地を南北に貫いて流れる玉串川。昭和40年ごろから周辺住民が協力して植えた桜の苗木が成長し、春には約1000本のソメイヨシノが5kmにわたって桜のトンネルを演出しています。桜並木は近鉄河内山本駅から北側2kmと南側3kmの川沿いに続いています。のんびりと散策してみませんか。



八尾マニアック対談

巻頭スペシャル企画

河内家菊水丸さん×山口孝満さん

八尾といえば河内音頭、河内音頭といえばもちろん河内家菊水丸さん!今回は八尾の魅力大使・河内家菊水丸さんが館長を務める「河内音頭記念館」にお邪魔して、毎月開催されている河内音頭セミナーの第89回目を取材させていただきました。テーマは、「八尾商工会議所 山口孝満会頭と語るコロナ後の河内音頭の展望とYaomaniaな話」。八尾のマニアックな話題ということで、収録の様様を誌面でご紹介します!

河内音頭に魅せられた少年時代、「山口レコード」の思い出

菊水丸さん 河内音頭記念館は八尾ファミリーロード商店街にありますが、もともとこの建物は、僕が小学校2・3年から高校時代にかけてレコードを買い漁った「山口レコード店」でした。僕の持っている河内音頭や浪曲のレコードの80%ぐらいは、山口レコードで買わせていただいております。

山口会頭 師匠はいちばんのお客さんでしたから。学生やのに音頭のレコードばかり見てはるから、変わったお客さんやな当時思っていました。

菊水丸さん この場所でレコード店を開かれたのは、会頭のお父様になるわけですが、なぜレコードやったんですか?

山口会頭 僕が小学5年生のときにこの建物を建てたんですけど、当時はレコードだけじゃなくて、15坪の店に文房具、花札、トランプなんかも売ってました。僕自身はレコードに興味は全くなかったんですけど。

菊水丸さん 僕やったら夜中お店閉めたあと、好きなレコードめっちゃ聞きまわったでしょうね。ももとは山口文紙という、紙屋さんやったんですね?文紙という地道な商売から、レコード産業という最先端に行きはったのはなぜでしょう?

山口会頭 これからは紙の時代やないと思った、ということしか、聞いてないですよ。

菊水丸さん 当時ほかにもレコード店はありましたけど、山口レコードの品揃えがいちばんすこかったですね。山口会頭は15坪とおっしゃいましたが、もっと広いように感じてました。

山口会頭 僕ももっと広いイメージでした。大人の目で見ると違いますがね。音頭のレコードはいつも床に置いてありましたよ。

菊水丸さん ピンクレディーとかは棚の上にあるんですけど、河内音頭や浪曲はダンボールに入れて床に置いてある。だから棚の下に頭を入れて、首を横にしながら見てましたね。

山口会頭 若い人が床にかがんでダンボールこそそしてたんで、違和感ありましたね(笑)。

菊水丸さん 若者でそんなレコードを買い漁っていたのは、八尾市内でも僕だけだったと言い切れますね。僕が今こうして河内音頭で商売できているのは、諸先輩方のレコードが栄養になっているからです。河内音頭の源流である浪曲を聞いて、耳学問でずいぶん研究させてもらった。それを買い求めたのがこの山口レコードなので、僕の原点と言ってもオーバーな話ではないんです。

山口会頭 師匠がそう言うてくださるのは嬉しいですね。

菊水丸さん 僕にとって、ここは塾みたいなのだったんです。河内音頭の教科書を買ってる場所。それが今こうして河内音頭記念館になるやなんて、小学5年生の僕は想像もしなかったでしょうね。僕をこの場所にもう一度戻して下さったのは、山口会頭なんですよ。

山口会頭 山口レコードがなくなって何年も経って、もう商店街の人も知らない時代に、師匠が雑誌で紹介してくださって。それを知ったときは本当に嬉しかったですね。

菊水丸さん 僕、MBSラジオで月曜から土曜まで10年間番組やりましたが、ゲストで来られる方に山口レコードで買ったLPにサインをもらってたんです。一度岡崎友紀さんが来られたときにサインしてもらいながら、「僕このレコード、八尾にあった山口レコードで買ったんです。まさかお目に掛かれるとは」ってお話したんですよ。というのも、ここで岡崎友紀さんのレコードを買うとき、レジに思いつき笑顔で持っていったんですよ。そしたらお店の方が、「僕、岡崎友紀好きか。ほな内緒やで」って、レコード会社からもらったサイン色紙をくれたんです。僕それずっと大事にしてたんですけど、この世界に入ってふと、「あの岡崎友紀さんのサイン、マネージャーが書いたんちゃうか?」って思ったんですよ、失礼な話。それでゲストに来られたときに聞いたんです、これご本人の筆ですか?って。そしたら、これ私です!って。ご本人が書いたサインだったんですよ!

山口会頭 良かった～。レジのおばちゃんが勝手に書いてたらどうしようかと(笑)。

菊水丸さん 山口レコードって力あるんやなあと。あれだけ忙しかったご本人の直筆サインをメーカーさんが持って来てくれるわけです。比べてみたら、当時ここでもらったサインと全く一緒でした。

山口会頭 奇跡みたいですね。

菊水丸さん ほんまに、子どもの頃に通ったレコード店がずっと自分の人生に関わって、今日この場所で河内音頭セミナーができるってほんまにありがたいなって。

山口会頭 それは僕が思うことですよ。師匠がずっと山口レコードを大事に思ってくくださるのがありがたい。

菊水丸さん ここは八尾の財産やと思ってます。

河内音頭、万博、空港…… コロナ後の八尾の活性化について



八尾商工会議所 会頭 山口孝満さん

菊水丸さん では続いて、ポストコロナの八尾の名物・河内音頭について伺いたいと思います。商工会議所の会頭として、コロナ後のまちおこしに河内音頭をどのようにお考えですか。

山口会頭 河内音頭は八尾の財産であり文化です。でもコロナで盆踊りもできず、河内音頭まつりも2年続けて中止になりました。

菊水丸さん でもまた、復活の日は来ますよね。

山口会頭 八尾市とも相談して、河内音頭まつりをリニューアルして、新しい方向で取り組んでいきたいなとは思ってます。

菊水丸さん そもそも昔は、八尾まつりの名前でやってましたよね。八尾河内音頭まつりに名前が変わって5～6年は出演させてもらってましたが、リニューアルでどんな祭りになるのか僕も楽しみです。コロナが終われば大いなる賑わいが期待されるでしょうね。大阪万博も目の前にあるので、その導入口に八尾がなるような気がしますね。

山口会頭 師匠もぜひ万博で檯に上がっていただきたいですね。

菊水丸さん 僕も過去には「花と緑の博覧会」や「愛・地球博」、「上海万博」に大阪府から依頼を受けて出演しましたが、大阪・関西万博も河内音頭で華やかにやりたいですね。

山口会頭 もう大阪・関西万博では、八尾を売り込みまくろうと思ってますよ。

菊水丸さん 大阪・関西万博ですからね。大阪が先に来ますから。大阪府の地図を見ると、八尾市はちょうどへそ、中心。へその八尾がやりまくらんことには、どこかやるって話です。

山口会頭 国内外に八尾を売り込むチャンスやと思ってます。

菊水丸さん 万博の頃にはコロナが終わって、インバウンドのみなさんも再びいらっしゃたらいいですね。そしてぜひ、夏には八尾で盆踊りも楽しんでほしい。

山口会頭 そうですね。少し話は変わりますが、八尾には飛行場もあるんですよ。全国でも地方の飛行場があるのは珍しいにも関わらず、あまり有効活用されてないんです。商工会議所としては、なんとか八尾の飛行場を活性化したいんですよ。八尾の特産品や文化も発信できますし、他の都市から届いた産直品を販売することもできます。富山県の越中八尾、八尾と書いて「やつお」と読むんですが、そこにも飛行場がありますから、お互いに文化交流もできます。

菊水丸さん やおは「河内音頭」で、やつおは「風の盆」がありますね。僕、「風の盆」の保存会との交流会でやつおに行ったんですけど、やつお駅がまた昔の近鉄八尾駅に似てるんですよ、高架になる前の。

山口会頭 やつおに限らず、白浜や岡山に定期便を飛ばすとか、これからもっと活用したいと思って先日大阪航空局に行ったんです。そしたら、八尾飛行場を民間活用するのは可能やと。ハードルはたくさんありますが、ダメではないと言われたんです。万博もありますし、おそらくIRも実現すると思います。そうすると、世界の富裕層の人がプライベートジェットできてくれたり、夢がどんどん広がります。

菊水丸さん 滑走路の長さや音の問題もあって大きい飛行機は無理ですが、セスナやヘリも飛ばせませすからね。仁徳天皇陵古墳、あれ、上から見ないとわからないんですよ。僕ら高校時代に行ったら、ただの森で。でも上から見ると、あの時代にこういうものをどうやって作ったんやろうって、古代ローマンの夢がふくらみますよね。

山口会頭 北海道に札幌丘珠空港ってあって、自衛隊と民間がうまく使ってるんですよ。そういうのも参考に、活性化していきたいですね。

菊水丸さん 八尾駐屯地盆踊り・花火大会もありますからね。昔、僕のマネージャーがダブルブッキングしたんですよ。その時はヘリコプター移動で八尾空港に降りました、着物のままで。

山口会頭 それはかつこいいですね!

菊水丸さん いや僕、高所恐怖症なので(笑)。そのときもセスナが何機ありましたけど、例えばカニが解禁になったら水揚げしてすぐ但馬空港から八尾空港に運んで、カニの食べ初め式をやるとか。若こぼうの初出荷を八尾空港でやるとかね。その時は滑走路で、初出荷音頭をうたいますから。「若こぼう八尾空港発出荷音頭」、もうできてますので。



伝統河内音頭継承者 河内家菊水丸さん

平成24年4月より、八尾の魅力大使を務める



なぜ八尾に?西武百貨店出店の裏側と、リノアスへの想い

菊水丸さん 3つめは、「八尾西武百貨店とリノアス」というテーマで語っていただきたいと思います。山口会頭はリノアスのオーナーであられますが、八尾に西武百貨店を誘致したのが会頭のお父様。西武ができたことで八尾のまちは大きく変わりましたが、どのような経緯で八尾に、東京の百貨店が来るようになったんでしょうか。

山口会頭 僕はうちの商売はここでやってたレコード店だけやと思って、全然知らなかったんです。東京に就職して昭和55年に八尾に帰って来た時、ちょうど地鎮祭をやったんですけど、それでもよくわかってなかったですね。

菊水丸さん 地鎮祭は、堤清二さんも来られたんですか?すごいなあ。

山口会頭 財産もない家ですので、なぜこれだけの事業ができたのか不思議なんですよ。いろいろ聞いてみると、堤清二さんとうちの父親の人間関係だけやったみたいで。

菊水丸さん どこで知り合うんですか?

山口会頭 飲み屋ちやいます?

菊水丸さん 案外そうだったのかもしれないですね。飲み屋で知り合ったとかちよつとしたきっかけを大きくするのは、会頭のお父様の腕でしょう。お父様はどんな方だったんですか?

山口会頭 河内のおっさんですよ。だからこそ、堤さんは新鮮だったかもしれないですね。

菊水丸さん でも、知り合ったとして、八尾に百貨店出しなはれて言うて、はいそうですかとはならないですよ。

山口会頭 うちの父親には、八尾のまちを活性化したいという想いは誰よりもあったと思います。百貨店を作りたいという野心があった。

菊水丸さん 西武は出店に際して、八尾にリサーチしにきたでしょうね。

山口会頭 なんでこの田舎に出すねん!? って思ったでしょうね当時は。

菊水丸さん まわり田んぼやし、カエル鳴いてますしね。それをどうやって説き伏せたのか。憶測ですけど、今東光が関わった可能性もなきにしもあらずですよ。堤清二さんご自身も作家ですし、文壇では今東光さんが大した方ですから。

山口会頭 あの時代は高槻にもできたので、西武が関西に出店するタイミングだったのかもしれないですね。関西圏に攻めていく時期と、父の想いが合致したのかもしれない。でもお金がなかったから、ほとんど借金でしたね。うそみたいな話ですけど、西武百貨店からも借りてましたね。竹中工務店が建てたんですけど、そこからも借りてます。

菊水丸さん 貸していたということは、勝算ありとふんでたわけですね？

山口会頭 父が亡くなった後で竹中工務店の方が教えてくれたんですけど、当時30代半ばだった父が突然「わし百貨店作りたいねん、でも金ないから貸してくれへんか？ そんでお宅のとこで建ててくれへんか？」って来たらいいですよ。みんな「大丈夫かこの若造!？」って(笑)

菊水丸さん でもそういう破天荒なやりかたで、八尾に大きな百貨店を持って来られたことは間違いなさそうですね。その西武が撤退することになって、山口会頭は「西武時代からテナントで入ってる皆さんのためにも、この建物は残してやっていく」という決心をされましたが、それはお父様が地元に残されたのと根本は同じですね？

山口会頭 父親の想いを受け継いでいるのはありますね。八尾市のために作ったものを、西武が撤退したからといって潰してマンションにすることはできなかった。八尾の商業の核ですから、近鉄八尾は、師匠にも無理を言うて、リノアス開業のときはテープカットをしてもらって、館内で流す河内音頭も作ってもらいました。リノアスでは一日3回、師匠の河内音頭がかかりますからね。

菊水丸さん 同級生がリノアスで働いてまして、「岸本くん(※菊水丸さんの本名)、いつも聞いているよ」って言われます。

山口会頭 撤退のことは、僕らもマスコミで知ったんですよ。まさかと思いましたね。たしか撤退が発表されて一週間以内に、僕の想いを書いて従業員エレベーターとか休憩室に貼ったんです。「ぜったい再建します!」って。

菊水丸さん やっぱ八尾の人にとってリノアスと名前は変わっても、あそこは生活に欠かせない。食料品やったりよそゆきの服を買ったりする拠点であることは変わらないですね。

山口会頭 ありがたいことに、西武時代より来店客数が増えたんですよ。それはほんとに感謝してます。

ポウルパンダ、モンパリ、そして三池先輩、八尾のレジェンド話

菊水丸さん では最後の話題です。「ヤオマニアな話」ということで、会頭は「ポウルパンダ」ってポウリング場があったの覚えてますか？

山口会頭 もちろん覚えてますよ、八尾がど田舎から都会になった走りの頃ですね。



菊水丸さん 昭和47年、上野動物園にパンダが来たときだったんですよ。会頭はポウルパンダ、行かれました？

山口会頭 何回も行きましたよ。当時は高校生ぐらいかな。いまの大阪経済法科大学で、昔はニチイがあったあの辺ですよ？

菊水丸さん そうです、ニチイはポウルパンダの跡地ですね。僕生まれて初めて、あそこでカップヌードル食べたんですよ。市場とかでは売ってなくて、友達とポウルパンダに行ったらカップヌードルの自動販売機があったんです。「これCMで見たやつや!」って。たしか100円で、友達5人と20円ずつ出し合って買ったんですよ。それをお湯が出るところに置いたら、上から棒が降りてきて蓋の紙を破ってジャーってお湯が出てくる。もうええか、まだ2分や、もうええやろ、あかん3分や!! って、みんなでまわし食べましたね。これが宇宙飛行士が食べるやつや! とかわけわからんこと言うて。

山口会頭 僕は、師匠もご存知の「モンパリ」。八尾観光会館の2階にあった喫茶店。あそこはおしゃれでした。

菊水丸さん 僕、夏休みに友達つれてモンパリに行っただす。夏は少年音頭取りのギャラがあるから、俺がおごった! ってチョコレートパフェ注文したんですよ。そしたら「僕、親のお金勝手に持ってきてるんちゃうか?」ってカウンターの人にえらい説教されたんですよ。いや、僕これ河内音頭で稼いだお金やからって言うたんですけど、「こういうお店にはもうちょっと大きくなってからおいで。今日はええけど」って、パフェにハーシーズのチョコレートをいっぱいかけてくれたはっただす。それから40年ほど経って、延田グループの会長さんの誕生日に河内音頭を歌ってくださって依頼があって行っただすよ。そしたらその会長さんが、モンパリで僕に注意しはった人やったんですよ。

山口会頭 え、カウンターの人が会長やったんですか？

菊水丸さん そうです、握手した瞬間にあの人や! って。注意したことは覚えてはりませんでしたけど、「わしやったら言うてるな」っておっしゃって。そんな思い出がありますね。

山口会頭 八尾観光会館、懐かしいですね。

菊水丸さん ところで会頭は、学校はどちらでした？

山口会頭 八尾小学校、成法中学校でした。

菊水丸さん 僕は用和小学校に入学して、途中で長池小学校に移ったんですよ。本当は長池小学校の第一期生だったんですけど、大阪万博の影響で建設が遅れて、一年だけ用和小学校に間借りをしたんですよ。用和小学校の運動場の小さいプレハブが校舎で、体育も隅の一角しか使えなくて、肩身の狭い想いをしました。

山口会頭 そうなんですか! 僕その話は全く知らなかったですよ。それからあの、柄のいい八尾中学校ですか？

菊水丸さん そうですね、活発な人が多かった八尾中です(笑)。八尾中の3年先輩に、八尾の魅力大使でもある三池崇史監督がおられるんですよ。一度映画の宣伝で僕のラジオにお越しになった時に、三池さんが「ご無沙汰してます」とおっしゃったんですよ。お会いしたことあった

かな? って思ってね。番組終わって帰られるときも「じゃあ、また」って親しくしてくださる感じで。なんでかなと考えると、三池監督って三池くんのお兄さんかな? って思い出したんですよ。

というのも、僕が八尾中にいた時代、体育祭の最後は河内音頭だったんですよ。当時僕はすでに河内音頭を歌ってましたから、僕がいた時は生の河内音頭で踊ってたんですよ。そのときにギターを弾いてくれたのが1つ下、2年生の三池くん。一度、三池くんの家で練習してるときに、お兄ちゃんが帰ってきたんですよ。そしたら家族みんなビビって、「岸本くんもう帰って」って。その怖いお兄ちゃんが三池監督やったんですよ。たぶん僕そのとき、挨拶したんでしょうね。なんとなく記憶では「おう、うちの弟のこと頼むで!」って感じて。それが「ご無沙汰してます」って挨拶しはった三池さんと全然つながらなかった(笑)。

山口会頭 それはだいぶ怖いんですね(笑)。今から想像できない。

菊水丸さん でもその裏付けに、僕が中一の時の先生と今もお付き合いあるんですけど、「岸本おまえ何年卒業や?」って聞かれて昭和53年ですって答えると、「三池より先か? 後か?」って。三池さんより先か後かがひとつの基準なんですよ(笑)。

山口会頭 もう伝説の人ですね(笑)。でも八尾中の誇りですよ。今となったら。

菊水丸さん ほんとですね、ご縁というのは不思議なものです。

河内音頭、寺内町、古墳や遺跡、グルメ、八尾は魅力がいっぱい

菊水丸さん コロナがおさまったら、また河内音頭記念館の前で踊りたいですね。

山口会頭 9月の踊り納め盆踊り大会、今年はやりたいですね。

菊水丸さん 今日は、僕の血となり肉となっているレコードの大半を購入した元山口レコード、いまは河内音頭記念館で、山口会頭とセミナーをやらせてもらいました。最後に会頭から、遠方からでも八尾に来てもらえるようにメッセージをお願いします。

山口会頭 八尾は地域資源がとても豊富で、久宝寺寺内町もありますし、古墳や遺跡もあります。若こぼろや枝豆などおいしいものもたくさんありますから、ぜひ一度来ていただきたいですね。

菊水丸さん リーズナブルでおいしいところはもちろん、「山徳」という料亭もありますから。そういうお店を紹介しているのが観光協会発行の『Yaomania』ですね。

山口会頭 はい、近鉄八尾駅にある八尾市観光協会に行ってもらえば八尾の観光のことはご案内できますし、レンタサイクルもありますから。

菊水丸さん ぜひ皆さん、八尾に遊びに来てください。



幼い頃から少年音頭取りとして活躍していた菊水丸さん。白黒の写真は中学3年生、八尾中学の体育祭で河内音頭を歌ったときのもの。



河内音頭記念館には、河内音頭にまつわる貴重な資料がずらり。手前のショーケースは、館長の菊水丸さん自らが定期的に企画内容を入れ替えて展示。



菊水丸さんが八尾を案内する雑誌の特集で山口レコードを紹介したほか、著書「音頭ボーイ」(ヨシモトブックス)の表紙イラストにも山口レコードが登場。

河内音頭記念館 八尾市本町7-12-24(ファミリーロード商店街内)
営業時間 10:00~18:00 定休日 火曜休館 ※年末年始および展示入替日は休館

収録後のプチ・インタビュー

〜コロナ禍の2年と万博への想い〜



— 八尾のマニアックなお話をたくさんお聞かせいただきましたが、コロナで盆踊りができなかったこの2年、菊水丸さんはどのように過ごしておられたのでしょうか？

小学校4年生ぐらいから河内音頭を歌ってますけど、こんな状況は初めてですね。ただ、一日一日を無駄にしないということ、ステイホームに入る際の目標にしました。何をするかと言いますと、ここがレコード店だった時代から買い占めた河内音頭や浪曲のレコードを全部聞いてみよう。普通は好みのものだけ買いますが、僕はマニアックな体質なので、これは聞かないだろうなというものも買っているわけです。そうしてコレクションしたレコードが何万枚とあるので、その音源を一年半かかってぜんぶ聞きました。その結果、好きじゃないものも聞いてみると、いいところがあるんだなというのがわかりました。「こうなりたい!」って、自分の趣味のものしか聞けなかったんですよ。でも趣味じゃないものも、方向性は違いますが、それを好むお客さんに伝えるようにちゃんと完成されているんですよ。それがわかったのがコロナでの収穫ですね。

— これまでずっと走り続けてこれたのが、コロナで研究する時間ができたんですね。

また盆踊りができるときには、引き出しが増えてインプットしたものを出せるのかな。今までは出すばかりだったので、ちょっと補充できたのかなと思います。とは言え、やっぱり人のレコードを聞くんじゃなくて、歌いたいなと思います。これが「飢え」というものかもしれないですね。河内音頭を歌いたいという飢え。今までは夏が来れば当たり前前に櫓が上がってましたけど、もう一回上がりた気持ちになりました。盆踊りが復活したときは、はちきれんばかりに歌いたいと思います。

— 菊水丸さんは1970年の万博グッズのコレクターでもあると伺っていますが、2025年の大阪・関西万博に期待されることをお聞かせください。



新型コロナウイルス感染拡大を受けて作った河内音頭「大阪コロナワクチン開発完成物語」の自筆歌詞も展示。

1970年の万博のときは、お祭り広場に阿波踊りとか花笠音頭とか、全国の民謡が集まる日があったんですよ。でも河内音頭は出なくて、なんでかなと思ったら、地元の盆踊りが忙しすぎて出演できなかった。呼ばれなかったのではなく、出られなかったんですよ。だから2025年の万博は、1970年の分まで河内音頭で盛り上げたいと思っています。



対談の内容は誌面に編集しています。ここには掲載しきれないマニアックな話題が満載の「第89回河内音頭セミナー」は、ぜひYouTubeをご覧ください。



河内音頭記念館の展示ケース。河内音頭の歴史や写真が展示されている。



祝・開局24周年!「FMちやお」のこれまでとこれから。

4月29日で開局24周年となる「FMちやお」。八尾市のコミュニティFMとして「地域ド!密着」を掲げ、八尾・河内の情報を発信しています。ラジオ番組だけでなく、ワークショップなどのイベント、YouTubeでの発信など多彩な活動を展開しているFMちやおの業務部長 鈴木昌宏さんに、これまでの取り組みや今後の展望などについて、お話を伺いました。



炭火みたいな温かさで、人に寄り添う。それがコミュニティFMの魅力かな。

阪神・淡路大震災を機に、コミュニティFMが続々開局

—今年24周年とのことですが、FMちやおが開局した経緯を教えてください。

1992年に市町村単位でラジオ局を持てる制度ができたんです。日本全国にラジオ局があったら、地域の情報発信ができるよって。そのあと阪神・淡路大震災が起きて、やっぱり地域密着のラジオ局が必要だということで、コミュニティFMの開局ブームがきたんです。FMちやおは1998年、全国で95番目の開局です。

—鈴木さんがFMちやおに来られたのはいつですか?

2002年かな。僕、八尾翠翔高校の前身の八尾東高校の出身なんです。FMちやおの当時の社長が高校のPTA会長で、僕はそのころフリーのラジオディレクターやっただけなんですけど、その人に声を掛けられて八尾に戻ってきました。それまではAD時代の県域ラジオ放送局やコミュニティFM局の立ち上げなどを、たくさんのお仕事をいただきました。

—いろんな地域のラジオ局でお仕事をされたのですか?

コミュニティFMで言えば、和歌山なら白浜、湯浅、田辺、兵庫なら尼崎ですね。面白かったのは白浜かな。夏が来ると、街中の色が変わるんです。観光客がいっぱい来るから番組も観光客に向けた内容にして、昼間は白浜ビーチでイベント、夜は花火を見ながら放送。それが7~9月まで続くんですよ。もう夢のようでしたね。

—地域によってやっぱり特色があるんですね。

久しぶりに戻って来られた当初、八尾はどんな印象でした?

最初の頃は人との距離感が近すぎて、ちょっとしんどかったです(笑)。僕も河内の人間で、なまじ地元すぎるから。どこに行っても知り合いがいるし、高校の卒業生も地元で商売してる人が多いから「やおとん(八尾東)出身です」って言うとおお~!みたいな。

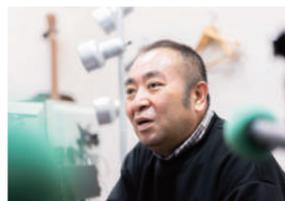
—たしかに、八尾は人との距離が近い気がします。

今年年間2000件の取材をされていますよね?

1日3件とか4件とか行きますからね。FMちやおはオレンジのジャンパーが目印なんですけど、現場に行ったら「ちやおさんまた来てるわ」って。でも、恩智川の清掃の取材に行ったら長靴とウエアを渡されるし、里山保全活動などを取材に行くと、軍手をはめて木を切ったり、雑草を刈ったり。「そこやっついて~」って。

—もう取材じゃなくて、お手伝いですね(笑)。

でもそうやって、可愛がってもらえることがありがたいんです。なにかあったときに信頼できる情報をもたらるように、人とのつながりを作っておくことも大切なので。



「人の声」で届けるラジオには、ぬくもりがある

—これまでの中で、リスナーの反響が大きかったのはどんな番組ですか?

最近では、先生からのメッセージですね。2020年の4月頃、緊急事態宣言が出て市内の学校が休校になってしまった時に、先生からのメッセージを放送したんです。「〇〇小学校〇〇先生から、児童・生徒さんへ向けてメッセージです」って読み上げるんですけど、その文面から、先生の想いが伝わるんです。「今、みんなの教室を掃除しています。ひとつひとつ机を拭きながら、語り掛けているんだよ。早く学校に戻って来てね、待ってるよ」って。読んでるほうも涙が出ました。

—その話を聞いているだけで、もう泣きそうです。

先生のメッセージの後に校歌を流すんですけど、それを聞いた親御さんが「久しぶりに聞いた、懐かしい」って喜んでくださったり。動画を送って来られる学校もあったので、それはFMちやおのYouTubeで公開しました。そのうち、子どもたちが所属するスポーツチームからもメッセージが来たり、そのチーム出身のプロ選手からメッセージが来たりして、あの時はすごい連帯感、一体感がありましたね。

—地域に根差したコミュニティFMだからこそ、できることですね。

コミュニティFMって普段は空気みたいな存在なんですけど、災害とかそういうときに必要になるんやなって思いましたね。震災を経験し現場のボランティアを通して感じたのは、暗くなって電気がガスもなくて心細いときに、いちばん心強かったのが人の声で飛んてくるラジオ。SNSもあるんですけど、ぬくもりが感じられないんです。文字だけだから。ラジオから聞こえる人の声って、ものすごく力になった。

—ラジオに人の気配、体温があるっていうのはとてもわかります。

ラジオって、聞いている人に直接届くんですよ。マンツーマンで人の声を届けられる。「ラジオの前のあなた、もう少しで救助が来ます。がんばってください」って言うんです。それが、SNSの拡散の仕方とは違う。

—パーソナリティと自分の一対一みたいな感覚は、ラジオならではの感じがします。

これまでの放送で、印象に残っていることはありますか?

僕が番組をやっていた時代に、リスナーさんから「あの曲をかけてもらって本当に嬉しかったです」とハガキをもらったことがあったんですけど、9時50分ぐらいにかけた曲が、長年探していた曲だったそうなんです。中学校の体育祭で踊ったけどタイトルも歌手もわからなかった曲がたまたまラジオから流れてきて、結局曲の終わりまで聞いて遅刻しましたって書いてあって。遅刻してもいいぐらい嬉しかったんですよ。ハガキをもらった僕も嬉しかった。ちよつとず嬉しかった感じが双方にあるところに、ラジオの醍醐味を感じました。

—ラジオには、そういう一期一会があるんですね。

ずっと炭火みたいに温まってるのがラジオなのかなと思いますね。炭火みたいにぶわっと燃えるものはないけど、ずーっとほんわか温かい。それが、何かの拍子に火がぼつと燃えるというか、例えばコロナとか災害とか何かのときに、その温かさに気付くのかなって思いますね。あ、ここに温かいのあった!みたいな。

人と地域に寄り添うために、ラジオの火を消さない

—一方で、FMちやおさんはSNSやYouTubeでの発信も積極的にされている印象です。

それも、どこまで追いかけていくのかは悩みどころですね。僕がラジオ業界に入った30数年前は、オープンリールやレコードで、そのあとカセットテープの時代になり、MDやCD、今ではデータのやりとりになった。メディアの移り変わりが本当に早くプラットフォームも変化するから、次に何がくるのかわからないんですよ。

—その中でラジオが残りに残っているのはすごい気がします。鈴木さんはFMちやおの今後を、どのように考えておられますか?

地域密着を第一に、とにかく地道に続けることかな。僕個人としては、次の世代のことは、次の世代の人に考えてもらったらいいのかなと思っていて。だから今は、しっかりバトンを渡せるようにと考えています。ラジオ局の根幹って、編成なんですよ。FMちやおとして何を発信するのか、この時間を何を流すかを決定するのが編成の仕事。そこがしっかりしていないと、個々の番組が面白くても、予算をとってきても、ラジオ局としては生き続けられない。だから、次の編成部門を担える人材を育てることに注力していきたいと思っています。

—2025年には大阪・関西万博が開催されますが、何か企画や取り組みなどは考えておられますか?

コミュニティFMは市民と近い存在なので、八尾でできることを考えています。ひとつは「映画のまち・やお」の応援企画として、「フィルム映像同好会」の活動ですね。前の大阪万博が開催された1970年頃に8ミリがご家庭に急速に普及し、全盛期を迎えたんです。当時はフィルム代も現像代も高かったから、それだけ想いが込められたものなんです。だから、提供してくださった方にはすごくお金を掛けて撮影されているんですよ、これは愛情ですよって話するんです。その貴重なフィルムを大切に残していくことは、想いを受け継いでいくことかなと思います。もうひとつは、次の万博のテーマ「健康」に沿った取り組みとして、障がいを持つ方やLGBTの方、さまざまなハンディキャップを持たれている方々に対して、コミュニティFMに何ができるかを考えています。例えば、耳や目の不自由な方にコミュニティFMラジオをどう楽しんでもらえるのかなど、うちができることをもっと考えよう。NHKの「バリバラ」のラジオ版みたいなものを作りたいかなと思っています。

一人に寄り添うメディアらしい取り組みですね。

大変な時やしんどい時に寄り添って温めるのが、炭火ですから。これからはずっと火を消さないように、絶やさずに続けていきたいですね。

「FMちやお」79.2MHz

八尾市光町2-3 アリオ八尾2F
☎072-990-1110
FAX 072-990-1112
(メッセージおよび番組FAX受付共通)



▲3年前から開催している震災展では、当時のマスコミ資料(新聞)や映像のほか、FMちやおと防災協定を結んだ八尾市のアマチュア無線非常通信連絡会の活動内容なども展示。期間中には「3.11震災展 関連講演会~震災の経験から学ぶラジオの重要性~」も開催されました。



▲2021年4月にスタートした「フィルム映像同好会」は1回の活動日に、カメラの使い方や撮影方法などを研修。「みせるばやお」にも機材などが展示されています。



▲2022年2月には、8月にリニューアルオープンされる「八尾文化会館プリズムホール」と共催で、ホールに展示する作品を八尾在住の童画家・徳治昭さんと共に制作するワークショップも開催。



安田真奈監督に聞く！ 八尾は、 どんな「映画のまち」 になれますか？

「八尾市フィルムコミッション」が発足し、「映画のまち・やお」に向けた取り組みがスタートした八尾市。そこで今回は、『幸福(しあわせ)のスイッチ』で和歌山県田辺市を、『36.8℃サンジュウロクドハチブ』で兵庫県加古川市を舞台にした作品を監督された安田真奈監督に、「映画を通じたまちづくりの可能性」について、お話をいただきました。聞き手は、「映画のまち・やお」応援企画として「フィルム映像同好会」を主宰しておられるFMちやお・鈴木さんです。



安田真奈／映画監督・脚本家

奈良県生まれ、大阪府在住。神戸大学の映画サークルで8mm映画を撮り始める。メーカー勤務約10年の間、インディーズ映画祭で計6冠のグランプリを獲得。2006年、映画「幸福(しあわせ)のスイッチ」の監督・脚本で劇場デビュー。第16回日本映画批評家大賞特別女性監督賞受賞。同年12月に男児出産後は脚本業中心となり、NHK「やさしい花」(文化庁芸術祭参加作品)、MBS「奇跡のホスピス」、関西テレビ「大阪環状線part2 芦原橋編 ダダダうてド」(文化庁芸術祭参加作品)などを執筆。映画「36.8℃ サンジュウロクドハチブ」(2017年公開)、ドラマ「TUNAガール」(2019年配信開始)の監督・脚本をつとめる。2021年12月より、監督・脚本作品「あした、授業参観いから。」劇場公開中。



©映画24区

安田真奈監督の『36.8℃ サンジュウロクドハチブ』は、加古川に暮らす女子高生の青春を、加古川の風景や食とともに描いた作品。主演は若手女優の堀田真由。

映画人のための映画ではなく、 まちの人が「自分たちの映画」 と思える映画づくりを。

加古川で実施された、 市民参加型の映画プロジェクト

鈴木 監督は今日、久宝寺寺内町や旧植田家住宅をご覧になったんですね。八尾のまちにはどんな印象をお持ちですか？

安田 いい感じの古さが残っていて落ち着きますね。ふだんの暮らしの中に息づいている、古き良きものがあるまちだと思います。

鈴木 映画のロケ地としてはどうでしょう？

安田 久宝寺寺内町は、観光地として整備されきってないところがいいですね。旧植田家住宅は、歴史のある素晴らしい建物ですね。敷地も広々しているので、撮影しやすいかなと思いました。

鈴木 安田監督は地域に関わる作品を多く手掛けておられますが、中でも加古川市で撮影された『36.8℃サンジュウロクドハチブ』は、自治体や市民の参加型プロジェクトとして制作された作品なんですね。

安田 製作会社の映画24区が自治体とタッグを組んで企画する「はくらのレシピ図鑑シリーズ」というプロジェクトの第一弾です。このシリーズは、地域の「食」や「高校生」とコラボした、企画の段階から自治体や市民を巻き込んだ参加型プロジェクトなんです。

鈴木 市民参加型の映画製作というのは、珍しいんですか？

安田 最初から自治体と一緒に作るだけじゃなく、完成後も自治体で自由に上映できる映画は珍しいですね。一般的には上映料が必要なケースが多いんですが、本作は自治体での上映は自由。だから、まちの財産として残り、ずっとまちの中で活用することができそうです。

鈴木 地域にフィードバックすることを前提にしたプロジェクトなんですね。

安田 撮影の時期だけロケ隊が来るんじゃなくて、企画段階から完成して世に送り出すまで市民が関わって、そのあと何度も上映できる。市民の財産として残る映画づくりが、「はくらのレシピ図鑑シリーズ」の特徴ですね。

大切なのは「自分たちのまちの映画」 という感覚を持ってもらうこと

鈴木 『36.8℃サンジュウロクドハチブ』では、市民はどんなかたちで参加したんですか？

安田 プロジェクトの主体は自治体で、映画24区は製作面をサポート。企画段階から、加古川市が「高校生応援隊」を募って、毎月、脚本やロケハンに関するレクチャーをされました。市民対象の演技ワークショップやオーディションも開催して、それらを広報誌で毎月発信されていました。

鈴木 撮影に入る前から、少しずつ関係性を作っていくんですね。

安田 いかにも「自分のまちの映画が生まれる」という感覚を持ってもらえるかが、ご当地映画を長く地域に愛してもらおうポイントになると思います。「高校生応援隊」も、「高校を卒業したら加古川を出て行ってしまおうから、その前に映画を通じて、まちの良さや地域の大人との関わりを見つめなおす機会にしてほしい」と募集されたものなんです。6校から集まった42人には、ロケ場所を探してもらったり、学校シーンの小道具を作ってもらったり。出演はもちろんのこと、舞台挨拶にも登壇してもらいました。映画が公開された次の年には、自分たちで市のPR動画を撮ってましたよ。

鈴木 ご当地映画として、名所をたくさん入れてほしい!とか、ここもアピールしてほしい!みたいなリクエストはなかったですか？

安田 そこは、そんなになかったですね。加古川の方は、ご自身のまちの魅力をあまり語られなかったんです。「姫路みたいに世界遺産もないし、神戸みたいに観光資源もないし、何にもないんです」って謙遜されて。その中で唯一、これは入れてほしいと仰ったのが花火大会。まちの一大イベントなのでぜひ、と。でも、花火のシーンで告白とか和解とか、よくあるじゃないですか(笑)。だから、どう使うかは考えさせてくださいとお伝えしました。

鈴木 実際はどんなシーンにされたんですか？

安田 楽しいはずの花火大会なのに、主人公の高校生女子が、友達と喧嘩してしまう…というシーンにしました。花火大会に向かう人々とは逆の方向に主人公が去っていき、センチメンタルな音楽が重なります。観光PR動画なら、華やかな花火に綺麗な音楽をつけますよね。映画なので、ストーリーにフィットする使い方にさせていただきました。

鈴木 映画ならではの見せ方なんですね。

安田 ロケーションはそのまま使うのではなく、シーンの狙いにあわせて見せ方を考えます。例えば主人公が心寂しいシーンに、河川を音楽とともにゆったり映すと、いつもと違う、切なく美しい風景に見えたりしますね。

鈴木 でも、市民の方が「何もない」と仰る土地で、ロケ場所を探すのは大変ではなかったですか？

安田 何もないって仰るんですけど、実際そんなことはないですよ。どこのまちにもあるんです、観光地じゃないけど素敵な場所。それを監督やカメラマンが見つけて映画のシーンに組み込んでいくのも、まちで映画を撮るおもしろさのひとつだと思います。例えば、川岸の小道を女の子たちが歩くシーンがあって、映画を観た方からは「どこの美観地区ですか?」ってよく聞かれるんですが、地元では用水路とか溝とか呼ばれている生活道路なんです。映画では洋館として登場する建物も、普段はおじさんたちが新聞を広げている図書館。そこを少し飾って、美しい洋館にしたんですね。皆さんが気づいていない素敵な場所を見つけること、今ある場所をお化粧することは、映画ならではの「まちの魅力を引き出し方」ですね。

鈴木 自分のまちがいい感じに撮ってもらえるのはうれしいですね。

安田 主人公と同世代の高校生たちが、「うちのまち、こんなにキレイやったんや!」って言ってくれたのが、私もすごくうれしくて。気付いてなかった自分のまちの魅力を映画の中で発見できるのは、シビックプライドの醸成につながるんじゃないでしょうか。

八尾を映画のまちにしたい! と思う若者を育てていく

鈴木 加古川の映画づくりは、すごく理想的なモデルケースですね。ただ、八尾は地元の人がすごくパワーがあるので、「あそこも撮って」「ここも入れて」ってなりそうになります(笑)。

安田 地域性の違いはあるかもしれないですね。加古川は「何もないですけど、映画になりそうな場所があったら使ってください」という感じでした。

鈴木 加古川市と八尾市は人口規模も世帯数もわりと近いのに、だいぶ違いますね。

安田 「映画のまち・やお」を目指すのであれば、八尾を映画のまちにしたい!と思う若者を育てられるといいですね。加古川のときも、映画を作って観光客の誘致につながるのかという声もあつたんです。でも、地元の人が地元の良さを見直さないとまちは元気がなくなるし、若い子たちは出ていったままになってしまう。だから、シビックプライドを醸成するための内向きのシティブロモーションも大事だ、ということで企画が通りました。

鈴木 八尾はなまじ色々観光資源があるだけに、外向けにアピールしたくなるもかもしれないですね。

安田 「八尾の魅力をつめこんだ映画にしよう」というスタートだと、色々詰め込んで観光PR動画みたいになるかもしれないですね。「映画のまち・やおで、若者に『まちと映画』に親しんでもらおう」というスタートなら、若い方も参加しやすく、映画づくりが盛り上がるかも?

鈴木 「若者」を入口にしておくんですね。八尾はおっちゃんおばちゃん元気なまちですから、そこは大事かもしれない(笑)。

安田 ロケにオススメの場所を若い方からインスタで募集して、八尾出身の映画関係者に審査していただく、写真にまつわるエピソードをシナリオに取り入れる、というのも良いですね。また、八尾出身の映画関係者や若手監督など、色んな方が色んな八尾を撮る…というのも面白いですね。

鈴木 まっさらな若い世代が八尾で新しいものを作っていく、既成概念のない人たちがどうやって自分のまちを作っていくのか、成長記録みたいなストーリーは見てみたいですね。

安田 子どもたちが描く未来の八尾をヒアリングするのもいいですね。それをアレンジして脚本にしても面白そうですね。

鈴木 いろいろな展開ができそうですね。最後に、いま未来のお話が出ましたが、安田監督は2025年の大阪・関西万博に関わられる予定や期待されることはありますか？

安田 仕事に関わる予定は今のところないですが、先日、万博記念公園にいったんです。コロナやウクライナ情勢など不安な中、梅の花と太陽の塔を眺めて、ホッと。世界中から技術や文化を持ち寄った1970年の万博は、本当に平和なイベントだったんだなあ…と、改めて感じました。2025年はいろんな国が穏やかに集える年になることを、一市民として願います。



～今こそまちを元気に!～ 「八尾市魅力ある観光創造基金」へのご寄附のお願い

八尾市では、まちのにぎわいの創出と八尾の魅力を見直し、市民の郷土愛の醸成を図るため「八尾市魅力ある観光創造基金」を設置しました。観光振興や「映画のまち・やお」づくりへの取り組み、2025年大阪・関西万博における市民の機運醸成と参画の取り組み等を進めるため、皆様からのご支援をお願いします。市外にお住まいの方からの寄附は、がんばれ八尾応援寄附金のふろさと納税制度の対象となります。法人の場合は、その金額が損金算入されるため、(企業規模等にもよりますが)ご寄附いただいた額の約3割(法人実効税率)相当額の軽減効果があります。

<寄附の手続き>

- ①「寄附申込書」を提出
- ②「納付書」にて寄附金を納付(納付書は市からお送りします)
- ③「寄附金受領証明書」の送付(市からお送りしますので、税申告時にご利用ください)

お問合せ
八尾市 観光・文化財課
☎072-924-3717



八尾から、世界の空へ。 大きく広がる可能性の翼。



八尾に本社を置く朝日航空株式会社は、小型機を使った各種航空事業を行う企業。五感で楽しむ体験プログラム「八尾物語」では、遊覧飛行を実施していただいています。今回は朝日航空の事業内容や今後の展開などについて、営業部の嶋村洋一さんにお話を伺いました。

パイロット養成事業の実績は、国内トップレベル

朝日航空が創立されたのは1967年。八尾空港を拠点に、航空機使用事業、航空機整備事業、パイロット養成事業を展開しています。なかでもパイロット養成事業には長い歴史があり、その実績は国内トップレベル。これまで数多くのパイロットを輩出しています。

航空会社のパイロット(エアラインパイロット)になるには、航空会社の自社養成、航空大学校、私立大学などと並んで、民間の飛行学校でライセンスを取得し、航空会社の試験を受けるルートがあります。朝日航空は業界でも老舗の民間飛行学校であり、機長経験者をはじめとする航空会社OBを講師に迎え、高い技術と圧倒的な指導力、オリジナル訓練シラバスで、ANAやJALなど大手航空会社をはじめ、そのグループ会社やLCCなどにもパイロットを送り出してきました。

現在も60~70名の訓練生が在籍し、将来の夢に向かって日々切磋琢磨しています。航空業界はコロナによる減便など厳しい状況にありますが、就職への影響を嶋村さんに伺いました。「パイロットの採用は継続して行われています。採用を中止すると年齢構成の分布が歪になり、先々問題が出てまいります。2030年問題と言われるように、今後明らかにパイロットが不足する流れのなかで、なんとかその隔たりを埋めようと各社採用を続けておられるのが現状です」。パイロット不足が懸念される状況だからこそ、即戦力となり得る人材の育成を担う民間飛行学校の役割は、より大きなものになっていると言えるかもしれません。



現在はコロナ禍により、授業の一部をオンライン化。訓練生たちの士気が下がるのでは?とお聞きしたところ、「感染を避けることの重要性を理解して、むしろ彼らのほうが気を付けてくれています」と嶋村さん。未来の航空業界を背負う可能性がある訓練生たちの、意識の高さが垣間見えました。

優秀な人材を育てる、朝日航空だけの2つの特徴

では、朝日航空ではパイロット養成のため、どのような訓練を実施しているのでしょうか。嶋村さんはその大きなポイントとして、次の2つを挙げてくださいました。

1つ目は、最新鋭FTD(飛行訓練装置)の導入です。FTDとはいわゆるフライトシミュレーターで、飛行訓練に使われます。朝日航空が導入している装置は、より実機に近いものをめざして、教官の意見をもとに自社で開発したオリジナルです。

「もともとはメーカーから購入したFTDを使用していましたが、訓練するなかで、改善や追加したい部分がいちいち出てきました。メーカーに対応してもらうにも限界があったので、それならいっしょ作ってしまおうということになって」と開発に着手。2~3年をかけて完成したFTDは映像も鮮明で機体も動くなど、エアラインが導入しているシミュレーターに迫るほどの高機能。実機と併用することにより、低コストで精度の高い訓練を実現することが可能になりました。国の認定基準を満たしており、実機の代わりに一部の課目の試験をFTDにて受けることもできるそうです。現在2台が稼働しており、3台目の開発も順調に進んでいるとのことでした。

2つ目は、就職支援を目的とした「アドバンスドコース」の設定です。必要な資格を取得した上で、将来エアラインパイロットとして活躍するための技能や知識、物事の考え方などを身につけます。「このコースでは飛行経験の豊富な大手航空会社出身の教官が担当し、エアラインが本当に必要とする人材の育成をめざします」。

パイロット不足が懸念される航空会社では、副操縦士を5~6年経験した後、できるだけ早く機長になれる人材が求められています。そのため採用試験では、7年後には旅客機一機を任せ、多くの乗客・乗員の命や財産を預けて大丈夫な人物かどうかを重要視されると言います。「今は飛行機自体が進化して機械の精度が上がった分、よりの確な判断が必要です。また、飛行機は1人では飛ばせませんから、クルーとのコミュニケーションも大切。技術だけではなく部分の指導にも力を入れています」。将来機長になり得る人材を育てるコースの設定も、資格の取得がゴールではなく、「エアラインパイロットを育てる」ことを大切にしている朝日航空ならではの特徴です。



今日が2回目のフライトという訓練生を乗せたセスナ機。3名の訓練生と教官が乗り込み、離陸前の計器の点検を行っています。



経験豊富な元エアラインパイロットの意見をもとに開発されたFTD。



ワンフロアに訓練生が机を並べる自習室。

八尾空港の恵まれた条件を生かし、さらなる発展へ

2025年の大阪・関西万博を控え、空の玄関口としての役割も期待される八尾空港。活性化や有効活用について、どのように考えておられるのかを伺いました。

「管制塔と2本の滑走路がある八尾空港は小型機の空港としては充実していて、大阪市にも近い立地条件にも恵まれています。東京の親会社ではビジネスジェットの需要も増えていますし、万博の際はチャーター機の利用なども見込めると良いですね。これから小型機が活躍するシーンを、我々ももっと提供できたらと思います」。

世界で活躍するエアラインパイロットの育成と、小型飛行機の利用拡大に向けて、朝日航空の可能性の翼はますます大きく広がっています。



朝日航空株式会社

〒581-0043 八尾市空港2-12 八尾空港内

☎072-991-7245

<https://www.asahi-air.com/>



公式HPはこちら

小型機のFTD(飛行訓練装置)を体験

朝日空港独自の高性能FTDで、遊覧飛行などに使うセスナ機の操縦に挑戦!八尾の上空を飛んできました



計器類がずらり。座ってすぐ操縦桿を握ろうとしましたが、「地上での移動や方向転換は、足もとのペダルを使います」と言われてびっくり。ペダルの上部を踏むとブレーキ、下を踏むと左右に動きます。



左手に操縦桿を握り、右手でスロットルを押し込み、方向舵のペダルを操作。十分な速度に達したら、ゆっくりと操縦桿を引いて離陸!飛び立つと、右手に久宝寺駅前のマンションが見えてきました。



計器を確認しながら、高度と水平を保ちつつ飛行します。「ちょっと天気を変えてみましょうか」と、乱気流モードへ。さまざまな状況に対応できるよう、天候の変化や計器の故障などが設定できるそうです。



夜景モードで美しい景色を眺めながら、八尾空港に帰還します。青く光っているのが八尾空港の滑走路。4つのライトが赤赤白白になったら進入角度OKの合図。最後は教官に手伝っていただいて、なんとか着陸することができました!



運航部 乗員養成課 機長 渡邊幹直さん

「車、バイク、船など乗り物がとにかく好きで、自分で飛行機を飛ばしたくてこの仕事に就きました」という教官の渡邊さん。ニュージーランドの航空会社で10年勤務した後帰国し、朝日航空で日本のライセンスを取得。



許麻神社・高麗王霊神という珍しい神様をお祀りしています。

八尾ミステリー「モスクワで発見された久宝寺観音院の梵鐘？」

久宝寺・寺内町にある許麻神社にも記載されている古社です。かつてはこの辺りは「許麻荘(巨麻荘)」といい、また「こま」は「高麗」の音と通じ、高麗の渡来人たちが集住したエリアといえます。社伝によると、それらの渡来人たちが自分たちの祖霊神を祀るために宮を建立し、それが許麻神社になったといえます。実際にいまでもご祭神として素盞鳴命、牛頭天王、許麻大神と並んで「高麗王霊神」という、なかなか他の神社では見聞しない珍しい神さまが祀られています。

また当社界隈には、かつて聖徳太子が開基したという伝説の「久宝寺」がありました。河内随一の大寺だったそうですが、戦国時代に松永久秀の兵火で焼失してしまい、しかし、その後継として久宝寺観音院が復興しました。ところが観音院も残念ながら明治時代の神仏分離令の影響などで廃寺となり、いまは本尊であった十一面観音だけが寺内町の念佛寺に祀られています。

今回、注目したいのは、この久宝寺観音院に、かつてあったという梵鐘です。十里(約40キロ)先でも鳴り響く名鐘として有名であったようで、寛政(1789~1801)年間の久宝寺の南町の大火の時には、火災を警告する鐘の音が、なんと生駒の山を超えて、遠くは大和高田あたりにまで達したといえます。

久宝寺村自慢の名鐘でしたが、しかし、明治の廃仏毀釈の混乱で、いつのまにか、どこかにいってしまうという悲劇に見舞われます。村人たちがいろいろと探し回ったのですが、発見できない。心痛めていたところ、まったく予想もしない形で梵鐘の行方が知られることになりました。

事の経緯はこうです。明治37年(1904)に日露戦争が始まりましたが、その兵隊として第六師団(熊本・大分・宮崎・鹿児島など九州南部出身の兵隊で編成された部隊)に徴兵された

清水重吉という男がいました。この清水重吉が大陸の戦闘でロシア軍の捕虜となり、首都モスクワまで移送されました。そして、そのモスクワで外出を許されたときに、とある「ニコライの寺院」(ロシア正教系寺院のことか?)に「澁川郡久寶寺村」と刻まれた梵鐘を発見しました。遠い異国の地で、日本・大阪の梵鐘を発見した重吉は吃驚仰天して、従兄の清水三吉に、そのことを伝える手紙を送りました。そして、それを読んだ三吉が、久宝寺村に問い合わせた結果、村人たちは自分たちが探し回っていた観音院の鐘が、なぜか遠くモスクワにあることを知ったというわけです。しかし当時の村人たちは取り戻す術などまったくわからずで、そのままにして放っておかれました。

一体、どういう経緯で「澁川郡久寶寺村の鐘」(これが本当に観音院の梵鐘かどうか確証はできませんが…)がロシア・モスクワの寺院に渡ったのか?さっぱりわかりません。清水重吉の手紙の話が本当かどうか不明です。しかし明治時代の廃仏毀釈によって仏像、仏画、仏具などが海外に流出し、外国人の好事家などがそれを求めたといった事例は数多くあります。おそらくは「久宝寺の鐘」もそういった経緯で流れていったのではないかと考えられますが、詳細はわかりません。

謎めいた梵鐘伝説ですが、じつは許麻神社境内にある手水舎は、久宝寺観音院の鐘楼を移したものです。天井を覗いてみると、やたらと高く梵鐘を吊るしていたとわかります。許麻神社をお参りしたさいは、ぜひともご覧になってください。また「モスクワのニコライの寺院」についても全く詳細はわかりません。もしかしら今もモスクワのどこかの教会に久宝寺の鐘が眠っているかも知れません。もし見つければ八尾史上に残る大発見でしょう。いつの日か、発見されることを祈りたいと思います。

<参考文献>

『許麻神社案内記』(許麻神社)、『大阪春秋44号』、『許麻神社手洗舎』案内板、『史跡の道・説明石板』(八尾市郷土文化推進協議会・八尾菊花ライオンズクラブ・八尾市教育委員会)

観光家 陸奥 賢

まち歩きプロデューサーとして300以上のコースを考案。「大阪七墓巡り復活プロジェクト」「直観讀みブックメーカー」「当事者研究スゴロク」なども手掛ける。著書に『まわしよみ新聞のすゝめ』。



ちゃんと「久宝寺観音院鐘楼」と書かれています。



手水舎・元鐘楼なので天井が高くなっています。



セメ子の攻め込み体験レポート

part6

カフェ ベリーで、名物のたまごサンドに挑戦! 編



真っ赤な外観が目印の「カフェ ベリー」は、焼きたてのワッフルやパスタランチが楽しめる人気のカフェ。中でも「絶品!!」と評判なのが、名物のたまごサンドです。今回は特別に、その作り方をマスターに教えていただきました!!

田頭茂実さん、真理子さん
茂実さんは、学生時代からのコーヒーショップでのアルバイトを経て、独立開業。接客や店内装飾を担当する真理子さんとのコンビネーションは抜群!



たまごサンドに、まちの名前つけた理由



カフェ ベリーのたまごサンドは、お客さんから「言たれへん!!」と言われるほどふわふわ。誕生したのは約10年前、マスターの田頭茂実さんがお店のある北本町の名物を作ろうと考えたことがきっかけでした。「2007年に八尾サティが閉店して、この辺りが少し元気がない時期だったんです。そこで、まちの活性化につながるメニューを作ろうと思い立ちました。」

田頭さんは若い頃から家で作っていた、オリジナルたまごサンドを再現します。「半熟に焼いたオムレツをパンにはさんで、電子レンジで少しチンしてパンをふわふわにするのが好きで、よく作っていたんです」。このレシピをもとに完成したたまごサンドは、まちの名物になるようにと願いを込めて「北本町たまごサンド」と名付けられました。

「北本町たまごサンド」は地元でそのおいしさが評判になり、さらにはテレビで紹介されたことで、知名度が一気に上昇します。「たまたま店の前の公園でロケをしていた吉本の芸人さんに、うちのお客さんが「このたまごサンド、おいしいから食べていき!」って勧めてくださったんですよ。そこから大きな話題になり、今では「たまごサンドと言えばカフェ ベリー」と言われるまでに定着。田頭さんの地元の想う気持ちを、見事に実を結びました。

少しでも長く、地元で愛されるお店に

お店の開店は約23年前。手作りジャムや旬の果物を使った焼きたてワッフルや、自家製ソースのパスタなどのメニューが楽しめます。お料理へのこだわりを伺うと、「基本を忠実に守って、シンプルに作ることでしょいか。クリームソースにしても、牛乳と小麦粉でとろみをつけるのではなく、生クリームを煮詰めてまろやかなとろみをつけるとか。そういう所は大事にしています」と田頭さん。ご自身もクリームパスタがお好きで、「クリーム系は自分が作るソースがいちばんおいしいかな」とお墨付きです。

長いカウンターがあるお店の奥には、季節ごとのディスプレイが目を引きます。この棚の演出は、ママの田頭真理子さんによるもの。開店以来ずっと、年5回にわたって装飾を変えています。「毎年新しい飾りつけにするのは、前年の飾りを忘れてしまうから(笑)」と朗らかに笑う真理子さんの明るさ、お店の魅力です。

最後に、これからの展望についてお聞きしました。「お店を始めてから、居心地のいい空間で、美味しいものを食べていただきたいという気持ちはずっと変わりません。今まで地元の皆さんにたくさん助けられましたから、コロナでもへこたれることなく、少しでも長く、八尾に貢献できるようなお店でありたいと思っています」。



北本町たまごサンドに挑戦!



1 たまごは1人分につき、贅沢に3個! スプーンとフォークの二刀流で手早く混ぜたら、塩と生クリームのみで味付けします。まさにシンプルイズベスト!



2 フライパンにマーガリン入りのバターを入れ、たまごを投入!そこから手を止めず、ひたすらかき混ぜます。「たまごは火の入れ方が重要!」とマスター。「焦げてしまったら断面も美しくないの、焼き直します」。



3 半熟の状態では、パンの形に合わせて四角く整えます。まとめるのにもたついで、火が通りすぎてしまいました……。「余熱を計算して火を止めるのが大切」とマスター。時間との勝負なんですね。



4 次はパンをカット。きめ細かくしっとりとしたパンは、力を入れると表面がもろもろになってしまうので、「包丁の重みだけで切るのがコツ」。慎重に、でもパンが乾かないように手早くカットします。



5 パンにマヨネーズを塗ったら耳をカットしてたまごをはさみ、3つに切り分けてお皿に盛りつけます。やわらかくて分厚いから、つぶさず切るのがこれまた大変。美しい断面があらわれたら、パセリを飾って完成です!



なんとか完成しましたが、食べ比べるとその差は歴然!マスターのはたまごがトロトロ(それでも通常よりは火が通りすぎたそうです)で、口に入れるとしっとりしたパンと自然に一体化。岩塩をかけて、たまごの甘みがより際立ちます。名物になるのも納得のおいしさ、お店でぜひ召し上がってください。その際はカウンターから、マスターの美技を見るのもお忘れなく!



カフェ ベリー 八尾市北本町2-11-15
TEL 072-999-0607 定休日:不定休
営業時間 月~日 8:00~19:00(L.O.18:30)
モーニング 8:00~11:00/ランチ 11:30~14:30



※緊急事態宣言等により営業時間が変更になる場合があります。



セメ子の攻め込み体験レポート part7

四十路ライター・金輪際セメ子が
八尾市内の気になる場所に潜入！
身をもって体験してレポートします。

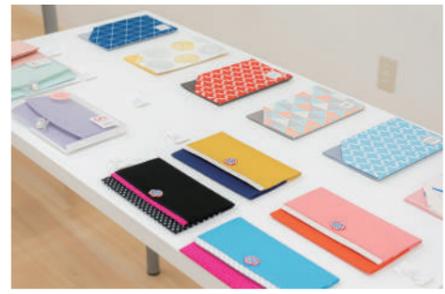
大一創芸で、工場見学とふくさ作り体験！ 編

冠婚葬祭に欠かせないふくさ(袱紗)を専門に扱う「大一創芸」。伝統的なアイテムを取り扱いつつも、最新の機械を導入したり、自社ブランドを立ち上げたり、新しいチャレンジをされている大山社長にご案内いただき、工場見学&ふくさ作りを体験してきました！

代表取締役社長 大山 誠さん
八尾市出身。営業職から転身して2代目社長に就任。袱紗や冠婚葬祭にまつわるマナーをInstagramやYouTubeで発信中。蝶ネクタイと丸メガネがトレードマーク。



廃業路線から一転、自社ブランドを立ち上げ



「実は僕、会社を継ぐつもりはなかったんです」と語る2代目社長の大山さん。つい7年前までは、営業として企業に勤めるサラリーマンでした。「父は事業を縮小し、いずれ廃業するつもりだったようです。それを聞いて、寂しく感じてしまったんですね。今はふくさを作っているというので調べてみたら面白そうだし、それなら僕が継いでみようと思ったんです」。

跡を継いだ大山さんが最初に着手したのが、自社ブランドの立ち上げでした。「当時は完全に下請けだったのですが、布の加工技術は確かですし、父がふくさにまつわる実用新案や特許を取っていたので、自社製品を製造・販売したらいけるんじゃないかと思って」。

そこで、「初めて結婚式に招かれた20代の若者」をターゲットに、外部のデザイナーと二人三脚でデザインや価格帯を設定。<STYLE fukusa>のブランド名で展開し、大手雑貨チェーンでの取り扱いも決まりました。しかもこれらを、社長就任わずか1年で成し遂げたというから驚きです。「外から来て業界のルールを知らない1年目だったから、思い切って挑戦できたのかもしれない」。

気持ちを包む「袱紗」という文化を守りたい

大山さんは今、ふくさを通じた日本文化の発信に力を入れています。「ふくさって、金封をわざわざ包むものですよね。そのひと手間が、結婚する友達や、亡くなった人を思い出す時間になる。「大切な人を想う時間を作る道具」として、若い世代につなげていきたいなと思います」。一緒にものづくりをしている近畿大学の学生たちも、その想いを伝えると共感してくれと言います。

若者に向けて冠婚葬祭マナーを紹介するYouTubeも開設し、「マロ」のキャラクターでご自身も登場。でもなぜか「僕が出てない動画のほうが、再生回数上がる」そうで、大山さんが顔を出さない「ふくさの渡し方」は、なんと6.8万回再生されています。

2025年の大阪・関西万博に向けて、河内木綿のブランドも計画している大山さん。八尾市出身ながら中学から私立に通ったため、地元のつながりが薄かったそうですが、「みせるばやお」や「ファクトリズム」などにも参加し、今では数多くの地元企業と連携しています。その中で、「河内木綿のふくさなどを作りたい」という想いが生まれ、今ブランド立ち上げの準備をされています。

また、「ゆくゆくは工場をオープンにして、個人のものづくりをサポートしたい」という構想も。2代目社長の活躍はまだまだ続きそうです。



工場見学&ふくさ作りを体験！



1 まず目についたのは巨大な裁断機。型紙をデータ化して入力すれば、ロスを極力おさえて正確に裁断できる高性能マシンです(以前は職人さんの手作業だったそう)。自社製品だけでなく、アパレル企業などの裁断も請け負ってられます。



2 今回はパーカーの裁断を見せていただきました。伸縮性のあるスウェット素材もスムーズにカットしてびっくり!これまでで最も珍しいオーダーを何うと「オーストラリアから依頼された、競走馬用のマスク」とのことでした。



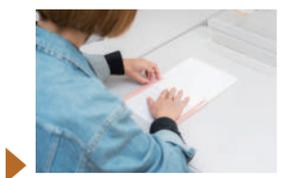
おしゃれなふくさができました〜!お祝いごとびつたり淡いピンクに、「目立ちすぎないほうがいいので」と選んでくださった白糸の刺しゅうも素敵です!ものづくりに込めた社長の想いや、相手を想う気持ちを包む美しさに触れて、ふくさ文化を大切にしていきたいという気持ちになりました。何より<STYLE fukusa>はデザインが多彩で、おしゃれ!カード入れなど普段使いもできそうです。



3 布用のプリンターも完備。若こぼしプリントの生地は、八尾のものづくり企業が共同出展する催しで使用するそうです。



4 校章や名前を入れる刺しゅうの機械は、卒業シーズン前にはフル稼働。15色の糸で模様や写真も表現でき、フォントも選ぶことができます。データどおりに再現してくれるなんて、すごいハイテク。今回は、「金輪際」の刺しゅうを入れていただきました!



5 ふくさは「大切なご縁が切れてしまわないように」と糸を使わず、台紙に布を貼って仕上げます(知らなかった!).両面テープをはがして接着したら、機械でしっかりプレスして完成です!



有限会社 大一創芸
八尾市宮町4-3-30
TEL 072-999-6414



金輪際セメ子
Yaomania編集・ライター。
中年太りが気になるビール好き。

セメ子の攻め込み体験レポート part8

炭火烧鳥 最上で、手羽先とつくねに挑戦！ 編

今回お伺いしたのは、炭火烧鳥「最上(もがみ)」。多くの常連さんで賑わう、地元で長く愛される人気店です。今回は11月に移転されたばかりの新店舗(超おしゃれ!)にお邪魔して、自慢の手羽先とつくね作りを体験させていただきました!

店主 足立龍亮さん
兵庫県神崎郡出身。15年前に八尾で開業。手間を惜しまない丁寧な仕事と、足立さんの気さくな人柄に惹かれるファンも多数。店名の「最上」は、地元の幼馴染が命名。



最初は、「完全アウェー」だった八尾



店主の足立さんが八尾に店を構えたのは、若干25歳の頃。それまで八尾には縁もゆかりもなく、「手頃な物件が見つかったから」という理由で八尾への出店を決めました。知り合いも全くいない八尾で始めた商売は、「完全にアウェーでした」と振り返ります。「手作りのピラを駅前までまくんですけど、邪魔や!って怒鳴られたり、兄ちゃんこれゴミになるから片付けや!って怒られたり。最初の3カ月は店に行くのが嫌で、えらいところで商売始めてしまったなあ……と思いましたね」。

開店当初はお金もなく、「食事はスープ春雨2個、休みの日はどこにも行かず犬の散歩だけ(笑)」で10キロも痩せたそうですが、徐々にお客さんがつき始め、いつしかすっかり八尾に根を下ろしていました。

八尾で商いを始めて15年、今では「実家のある兵庫より、八尾のほうが落ち着きますね」と足立さん。2021年11月に移転した「八尾の地元のつながりのおかげで、運命的に見つかった」という新店舗も、旧店舗からわずか200m。自宅も八尾に構え、今ではもう文字通り、八尾がホームになりました。

丁寧な仕事と、気さくな人柄が魅力

焼鳥屋を始めるまでに、さまざまな飲食店を経験した足立さん。焼鳥屋は「5年働いた寿司屋より簡単やし、焼鳥ええやん!みたいなノリで」始めたと言いつつ、開業までに気になるお店を片端から渡り歩き、レシピを研究。「いいなと思うお店があったら、事情を話して、働かせてください!ってお願いして。夕方から夜と、夜から朝まで、1日2軒掛け持ちしてました」。

修行時代に親方から言われた「早く、きれいに、丁寧に」を守るその仕事ぶりは、実にきめ細やか。「このほうが美味しいし、食べやすいから」と、手間を惜しみません。1本の焼鳥にこんなに気遣いがなされているとは……と驚いていると、「説明して初めて、自分でもこんな細かいことやってるんやなってびっくりしました」と仰います。この丁寧な仕事と飾らない気さくな人柄こそ、長年地元で愛されている理由なのだ実感しました。

新店舗は天井も高く、ゆったりと落ち着いた雰囲気。常連客でもある大工さんと2人で手掛けたという内装も、シックで洗練されています。この新天地で、足立さんはどんな夢を描いているのでしょうか。「細く長く、商売やっていけたらいいなと思ってます。ずっと変わらず来てくださるお客さんのおかげで今があるので、ほんまに感謝しかないです。初心を大事に、傲慢にならず、真面目に、70歳ぐらいまで続けられたらいいですね。」



手羽先とつくねに挑戦!



1 まず、手羽先の先の部分を切り離します。関節と関節の間に包丁を入れると、スツと切れて気持ちいい!でもそこから身を開くのが難しく、「斜めに刃先を入れて、骨の上を滑らせるように」と教えてもらっていますが、なかなか上手くできません…。



2 次に、鉄砲串と呼ばれる串を、骨と身の間に縫うように入れていきます。「こうすることで肉がぐるぐる回らず、キレイに焼けます」とのこと。串が出ると焦げたり、皮が曲がっているとムラになったり、串打ちだけでも気を付けることがたくさん!



3 人気の「熟成塩つくね」は軟骨やモモなどの鶏ミンチに卵や山芋などを混ぜ、絞り出すように丸めて茹で。茹でたあと冷蔵庫で休ませて串を打ち、表面を油に軽く潜らせてから焼きます。焼くまでに、こんなに手間がかかっているんですね…!



4 いよいよ焼きの作業!備長炭で焼き上げます。足立さんは鉄心にのせて直接、私は焦がしそうな網の上で焼くことに。相当な熱さですが、肉は強火の直火が良く、「火力が弱いとおいしい肉汁も油もぜんぶ出てカスカスになってしまう」とのこと。



ついに完成〜!

書ききれないほど、足立さんの「美味しく食べてもらうため」の細かい仕事に感動しました!!下処理から串打ち、味付け、火の調整まで、本当にやることたくさん。でも手間の分だけ、美味しさも格別です!手羽先のパリッと香ばしい皮と身の旨味、つくねのさっぱり塩味と軟骨の絶妙な食感…。ぜひ一本ずつ、じっくり味わって食べてください。



炭火烧鳥 最上 八尾市本町5-8-21
TEL 072-999-1118 定休日:日曜
営業時間 17:00~23:00

※緊急事態宣言等により営業時間が変更になる場合があります。